「取るに足りない僕として―どこまでも主の僕に徹する―」

ルカ 17:7-10

2020.4.19 南与力町教会朝の礼拝

序：今日の箇所のテーマ―「僕として仕える姿勢」

先週は主イエスの復活を喜び祝うイースターの礼拝をささげました。その前は主イエスのご受難を覚えて礼拝をささげました。その間、ルカによる福音書からは離れていましたが、本日からはまたルカ福音書から主の御言葉に耳を傾けていきたいと願っています。

今日の箇所はイエス様が使徒たちに語られた、ルカ福音書のみに記されている「たとえ」です。ここで教えられている中心的なことは「僕として仕える姿勢」です。しかし、なぜイエス様はそのことを使徒たちに教えられたのでしょうか。イエス様は前のところで使徒たちに語っていました。６節
「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」

「わたしどもの信仰を増してください」（５節）と頼む使徒たちに対してイエス様は、「からし種のようなごく小さな信仰さえあれば、不可能に思えることも可能になる。どんなに難しそうなこともできる」と励まされたのです。そして実際、使徒たちは後に、教会の指導者として多くの働きをしていった人々です。その使徒たちにイエス様は「僕として仕える姿勢」を教えられました。それはおそらく、これから大きな働きをするであろう使徒たちが、それゆえに高慢になってしまう危険をイエス様は見抜いておられたからではないでしょうか。信仰をもって奉仕したとしても、そこで自分を誇り、高慢になってしまう危険は常にあるのだと思います。「自分はこんなに大きな働きをした」と自分自身を誇るようになってしまう。そのような危険は私たちにもあります。そうならないためにイエス様はここで「僕として仕える姿勢」について教えられたのです。

Ⅰ．たとえのあらすじと適用――主人と僕の関係性

今日の箇所ではまず７～９節でたとえが語られ、最後の１０節で適用が語られます。まずたとえの部分を見ていきたいと思います。７節～９節
「あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。」

たとえは、「あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合」という言葉で始まります。もしあなた方の一人が僕の主人であったなら、どうだろうか。そのことを考えよ、想像せよ、ということです。自分の僕が外で「畑を耕す」あるいは「羊を飼う」という仕事を終えて、家に帰ってきます。その時、あなたはその僕に「すぐ来て食事の席に着きなさい」と言うだろうか。いや、誰も言わないだろう。むしろ、彼にこう言うのではないか。『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と。

ここではある程度小さな家の主人のことが考えられているようです。大きな家の主人であれば、何人もの僕（奴隷）を持ち、外で働く僕と家の中で働く僕がいたはずです。しかしこの主人にはおそらく一人の僕しかいないのです。ですから、その僕に屋外での仕事と家の中で仕事の両方を頼む必要があります。僕が外での仕事を終えて帰ってきたからといって、主人が僕のために美味しい料理を作って待っているというようなことは普通ないのです。むしろ、「私の夕食の準備をしてくれ、私の飲み食いが終わるまで、腰に帯をして、私の食卓の給仕をしてくれ、私に仕えてくれ。その後で、あなたは飲み食いしなさい」そのように言うのが普通の主人ではないか、と主イエスは言っておられるわけです。

そして９節では「命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。」と問うておられます。僕が主人の言い付け通り畑仕事や羊の世話をしたとしても、そのことでいちいち主人は僕に感謝するだろうか。「畑仕事をしてくれてありがとう、羊の世話をしてくれてありがとう」と言って、帰ってきた僕に食事を用意して、ごちそうする主人がいるだろうか。そんなことは普通しないではないか。このことをイエス様は言っておられるわけです。

そして最後の 10 節で適用がなされます。
「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」

これがたとえの結論、イエス様がおっしゃりたいことです。しかし、これまでは「あなたがた」は主人の立場にある者として語られてきたのですが、この最後の部分では「あなたがた」は「僕」の立場に変わっています。「主人」から「僕」へと立場がひっくり返っている、逆転しているのです。たとえの中では「もしあなたがたの一人が僕を持つ主人だったら」と考えさせておきながら、最後の適用ではひっくり返る。あなたがたは実は「僕（奴隷）」なのだ、と。そしてあなた方は主人に対して『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい、と結論付けられるのです。

Ⅱ．湧き起こる疑問と答え―主イエスが語ろうとしておられること

・たとえの「主人」はイエス様？

では私たちの主人とは誰でしょうか。それはイエス・キリストです。今日の箇所の前の 17 章 6 節で「主は言われた」と、イエス様のことが「主」と言われていますが、これは「主人」とも訳すことのできる言葉です。使徒たちにとって、そして私たちキリスト者にとって、「主人」とは「イエス・キリスト」に他なりません。私たちは主であるイエス・キリストの僕なのです。

しかし、そう考えるとある疑問が出てきます。このたとえに出てくる主人の姿は、どうもイエス様の姿とは違うのではないか、ということです。このたとえでは主人が働きから帰って来た僕をねぎらって、食卓の席に着かせることはしません。むしろ自分の夕食の準備をさせ、食卓の給仕をさせるのです。確かに普通の主人はそのようにするでしょう。しかし、イエス様は果たしてそのようなお方なのでしょうか。ルカ福音書 12 章 37 節でイエス様は次のようにおっしゃっていました。
「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」

普通の主人が僕たちのために給仕をすることなどあり得ません。しかしイエス様という主人はそれはしてくださる、というのです。ご自分が家に帰ってきたとき、目を覚まして待っていた僕を食事の席に着かせてくださる。そして自ら腰に帯を締めて、僕たちのそばに来て、食卓の給仕をしてくださる。主人が僕に仕える。そのような驚くべきことをするのがイエス様なのです。さらにルカ福音書 22 章 27 節でもイエス様はこうもおっしゃっています。
「食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。」

普通は偉い主人が食卓に着くはずです。しかし、イエス様は「わたしはあなたがたの中で（弟子たちの中で）給仕する者である」と言われるのです。
そのように考えていくと、今日の箇所で描かれている主人の姿、すなわち働いて帰ってきた主人を食卓に着かせず、むしろ自分の食卓の給仕をするよう命じる主人の姿はどうもイエス様の姿とは違うのではないか、と思えるのです。このことを私たちはどのように考えるべきでしょうか。
まず心に留めるべきことは、イエス様は今日のたとえを通して、ご自分がどのようなお方かを教えようとされているのではない、ということです。先ほど見たように、このたとえにおいてイエス様は「あなたがたのうちの誰かに僕がいる場合」と語り始めておられます。イエス様はたとえを通して「わたしはこういう主人だ」と教えておられるのではなく、「あなたがもし主人だった場合、僕にはこうするのではないか」という一般的な話をしておられるのです。そのことをわきまえておく必要があります。
しかし、ではなぜイエス様はこのような、ともすると誤解を招きかねないようなたとえを語られたのでしょうか。それはやはり結論部分を言いたいためです。すなわち 10 節
「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」

「あなたがたも同じことだ」と言いながら、イエス様はこのような主人としてあなたがたも振舞えと弟子たちに言っているのではありません。そうではなく、このような一般的な「僕と主人の関係」を踏まえて、あなたがたも「僕」としてふさわしく振舞いなさい。すべての働きを終えたとしても、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。このことをイエス様は言おうとされているのです。

・「報いを期待するな」ということ？
そのことをわきまえた上で、このたとえを通してイエス様は私たちに何を教えようとされているのか、さらに考えたいと思います。しばしば言われることは、イエス様はここで弟子たちに「あなたがたは僕（奴隷）なのだから主人から何の報いも期待するな」ということを言おうとされている、ということです。それは一面当たっていると思います。しかし聖書全体から考えるならば、「報いを何にも期待するな」というのは聖書の教えでも、またイエス様の教えでもありません。先ほど見たように、主人であるイエス様が帰って来られる再臨の時、イエス様は目を覚まして待っていた僕たちを食事の席に着かせ、自ら給仕をしてくださいます。それは主から僕たちに与えられる大きな栄誉、報いではないでしょ

うか（ルカ 22:28-30 も参照）。またルカ福音書 6 章 22 節 23 節では次のようにおっしゃっていました。「人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。」

このようにイエス様のために苦しみを受ける者には、天に大きな報いがある、とイエス様ご自身がはっきりおっしゃっているのです。そう考えると、「僕なのだから主人からの、イエス様からの報いを全く期待するな」というのはイエス様の教えではないことがわかります。私たちは僕でありながらも、イエス様が再び来られる時には、報いをいただける。イエス様の喜びの食卓に着かせていただける。天には大きな報いが用意されている。そのことを期待してよいのです。

ではなぜイエス様は今日のようなたとえを語られたのでしょうか。イエス様は７節で「その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。」と問うておられます。「すぐに」という言葉が重要だと思います。イエス様は再び来られる終わりの時、私たちには確かに報いが与えられます。しかし、それは私たちがある奉仕、ある仕事を終えたら、「すぐさま」その働きに見合った報い・褒美がもらえる、ということとは違うのです。私たちは「報い」を携えて来られる主イエスを待ち望むべきであり（黙示 22:17 参照）、この世で「すぐさま」自分の働きに対する報酬・報いがもらえると期待すべきではないのです。

それは言い換えるなら、自分の働きや奉仕を主の御前における「功績」のように考えるべきではない、ということです。「自分はこれだけ主のために働き、功績を積んだから、主は私にそれに見合った報酬をくださるはずだ」という考えをすべきではないのです。それは私たちを高慢にする間違った考え方です。なぜなら、主からの報いとは、私たちの功績に対して当然支払われるべきものではなく、ただ恵みによって主が与えてくださるものだからです。私たちの側にそれを要求する権利はありません。むしろ私たちはいかなる働きをしたとしても、主人であるイエス様に言うべきなのです。
『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と。

イエス様は、そのように徹底して主の御前にへりくだる「主の僕」としての在り方、態度、姿勢を私たちに求めておられるです。

・なぜ「無益な僕」なのか？

ここで「取るに足りない」と訳されている言葉は、普通「無益な、無用な、役に立たない」という意味を持っています。しかし本当にこの僕は「無益で役に立たない」のでしょうか。イエス様は「自分に命じられたことをみな果たしたら」このように言いなさい、おっしゃっています。主人から言われたことをすべて行なったのですから、この僕は実際には無益でも、役に立たない者でもないはずです。むしろ「私は役に立つ、有益な僕です」と言ってもよいくらいです。それなのになぜ「私どもは無益な僕です」と言わなければならないのでしょうか。

それに続く最後の言葉は『（私たちは）しなければならないことをしただけです』というものです。「しなければならない」と訳されている言葉はもともと「負債がある、借金している」という意味の言葉が使われています。そこから「負い目がある、果たすべき責任がある、当然～する義務がある」という意味が出てきています。僕が主人に命じられたことをするというのは、当然なすべき義務であり、言わば主人への借金、負い目を返しただけなのです。借金を返したとしても、相手に利益もたらすわけで

はありません。そういう意味で「私どもは無益な僕です。あなたに益をもたらすような僕ではありません。私たちが当然なすべきことをしただけです。あなたへの義務を果たしただけです」、そのように言いなさいと主イエスは教えておられるのだと思います。

結論：

今日のイエス様の教えは、私たちがどのような姿勢や態度で奉仕しているのか、あるいは何を目的として奉仕しているのかを鋭く問うものです。私たちはなぜ教会で奉仕するのでしょうか。自分のためでしょうか。自分が人から感謝され、称賛され、報いを受けるためでしょうか。そうであるならば、私たちは人からそれを受けた時、どんどん高慢になっていく危険があります。「自分はこんなに大きな働きをした。私は特別に有益な僕、役に立つ僕だ」と自分を誇り始めるのです。あるいは逆に、奉仕したとしても、自分が期待していたような感謝や評価、報いを受けられなかったとしたらどうでしょうか。不平不満を言うようになるのでしょう。もう嫌になって奉仕を止めてしまうかもしれません。しかしそのような在り方は、主がここで教えておられることとは根本的に異なります。

私たちが奉仕するのは、「自分のため」ではありません。そうであってはならないのです。私たちが奉仕するのは、どこまでも「主のため」です。主であるイエス様に喜んでいただくためです。それは私たちが「主の僕、イエス・キリストの僕」だからです。私たちは元々、罪と死の奴隷でした。しかし、主イエスご自身が私たちに仕える僕の身分となり、私たちのためにご自分の命を身代金として献げてくださいました(マルコ 10:45)。私たちは神の子イエスの命という尊い代価によって贖われた、買い取られたのです。それゆえに私たちは「主のもの」(ローマ 14:8)、「主の僕」なのです。わたしたちはその主に感謝をもって仕え続けていく。それは私たちが当然為すべきことです。どれほど多くの働き・奉仕をしたとしても、たとえ主から命じられたことをすべて果たし終えたとしても、私たちはそれを主の前に誇ることはできません。むしろ主の御前にへりくだり、「私どもは無益な僕です。なすべきことをしたに過ぎません」と言うべきなのです。そのように、私たちがどこまでもへりくだり、「主の僕」に徹すること。そのことを主イエスは望んでおられます。お祈りいたします。

祈り

主よ、私たちは、自分の働きや奉仕のゆえに、自分を誇り、高慢になってしまいやすい愚かなものです。あるいはすぐに報いを期待し、それが得られないと不平を言ってしまうような弱いものです。どうぞ主が私たちの高慢を打ち砕いてください。どのような働きをしたとしても、あなたの御前にへりくだり、「私どもは取りに足りない無益な僕です。なすべきことしただけです」と言うことができますようにしてください。そのような「主の僕」として忠実に仕え続けていくことができますように、私たちを守り強めてください。主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン。